

第二章 父帝悲秋の物語

[第一段 父帝悲しみの日々]

はかなく(とりとめもなく)日ごろ過ぎて(数日が過ぎて)、後の業(のちのわざ、七日ごとの追善法要)などにも こまかに(懇に)弔はせ(とぶらわせ、帝は使者を遣わせ弔問をなさり)給ふ(あそばしました)。ほど経るままに(そんな風に暮らすうち)、為む方なう(せむかたのう、どうしようもなく)悲しう思さるるに(帝は悲しく御思いになって)、御方がたの御宿直(とのい、夜伽)なども絶えてし給はず、ただ涙にひちて(浸って)明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人(御世話係の女房)さへ露けき(涙がちの、草木も濡れる)秋なり。「亡きあとまで、人の(妃や女房の)胸あく(明く、晴らす)まじ(拒じ)かり(続)ける(行する)人の(桐壺への)御おぼえ(帝の御寵愛)かな」とぞ、弘徽殿(こきでん、第一婦人、右大臣の娘)などには なほ許しなう(未だに許せない)のたまひ(宣い)ける。一の宮(いちのみや、長男、弘徽殿との御子)を見たてまつらせ(帝に面会させ)給ふにも、帝は若宮(わかみや、次男、桐壺更衣との御子)の御恋しさのみ思ほし出でつつ、若宮が住む故大納言邸に親しき女房、御乳母(おんめのと、帝の乳母)などを遣はしつつ、若宮のありさまを聞こし召す。

[第二段 鞆負命婦の弔問]

野分(のわき、晩秋暴風)立ちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、帝は故御息所を常よりも思し出づること多くて、鞆負命婦(ゆげいのみょうぶ、夫が鞆負という矢筒武官を務める中級女官)といふを母北の方邸に遣はす。夕月夜の(ゆうづくよの)をかしき(際立つ)ほどに(時分に)帝は使者の命婦を出だし立てさせ給ひて、自身は月をやがて眺めおはし(御座し)ます。御息所の生前にはかうやう(斯様)の折は、帝は御息所に器楽の御遊びなどせ(演じ)させ給ひしに、心こと(殊)なる物の音を掻き鳴らし、はかなく(思い付くまま)聞こえ出づる(詠んだ)言の葉(ことのは、和歌)も、人よりは ことなりし(殊なりし、格別な)けはひ(趣ある)容貌(かたち)の、面影につと(ずっと)添ひて(添うように)思さるるにも、闇の現(やみのうつつ、昔の歌に「暗闇で実際に会う闇の現より、夢ではっきり見たい」という意味のものがある)には なほ(やはり)劣りけり(夢は幻に過ぎない)。

命婦(みょうぶ)、かしこ(彼処)に参(もう)で着きて、牛車が門(かど)引き入るるより(門から引き入れられるや否や直ぐ目にした)、けはひ(様子は)あはれなり(物悲しかった)。やもめ(寡婦、故桐壺更衣の母北の方は故大納言家の後家)住みなれど、人一人(ひとひとり、故桐壺更衣)の御かしづき(傳、御養育)に、とかく(何かと)つくるひ(繕い)立てて、めやすき(目安き、屋敷を見苦しくない)ほどにて過ぐし給ひつる(以前は暮らしていたが)、闇に暮れて臥し沈みたまへるほどに(今は娘も亡くして落胆し)、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ(月影だけが)八重葎(やえむぐら、雑草茂る草むら)にも障はらず(さわらず、遮られず)差し入りたる(差し込んでいた)。命婦は南面(みなみおもて、南向きの客殿)に下ろして(車を付けて下車して挨拶を交したが)、母君も、とみに(咄嗟に)え(そう巧くは)ものも(あれこれ)のたまはず(話せない)。

「今まで とまり はべるが(留まり侍るが、娘が先立ったのに自分が生き留めていて)いと憂きを(なんとも心苦しいのに)、かかる御使の蓬生(よもぎゅう、ヨモギが茂る荒地)の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしう(とても恐縮)なむ(致します)」とて、げに母北の方はえ堪ふまじく泣いたまふ。

命婦はこれに应えて、「『参りては(此方へお訪ねすると)、いとど心苦しう(とてもお気の毒で)、心肝(こころきも、心底から)も 尽くるやうに(悼ましい気が)なむ(致します)』と、典侍(ないしのすけ、先日伺った同僚の女官)の 奏したまひしを(帝に御報告されていたのを聞きましたが)、自分のようなもの思ひたまへ知らぬ(趣が分からぬ、あさはかな)心地にも(者でさえ)、げにこそ(なるほど)いと忍びがたう(まことに残念に)はべりけれ(存じます)」とて(と云うと)、ややためらひて(しばらくして落ち着いてから)、仰せ言(帝の仰せを)伝へきこゆ(伝え聞かせた)。

「『しばしは夢かとのみ(暫くは夢ということにして)たどられしを(誤魔化して来ましたが)、やうやう思ひ静まるにしも(近頃やっとな落ち着いたものの)、覚むべき(さむべき、不幸を受け止め)方なく(切れない)堪へがたきは(辛さを)、いかにすべきわざにかとも(どうしたものかと)、問ひあはずべき人だになきを(慰め合う人さえ居ないので)、忍びては参りたまひなむや(喪中を押して訪ねて参られませんか)。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しう思さるるを、とく参りたまへ(若宮の暮しぶりも気掛りなので早く連れて御出でなされよ)』など、はかばかしうも(すんなりとは)のたまはせやらず(お申し付け切るでもなく)、むせかへらせたまひつつ(涙に咽ながら)、かつは(それも)人も心弱く見たてまつらむと(人から気弱に見られるのを)、思しつつまぬに(隠そうとなさらない)しもあらぬ(でもない)御気色の心苦しさに(御様子が居た堪れず)、承り果てぬやうにて(皆まで聞かぬ)なむ(ままた)、まかではべりぬる(罷り越しました)」とて、御文奉る(命婦はそう云って北の方に帝の手紙を差し上げる)。

「目も見えはべらぬに(なみだで目も見えませんが)、かく(このように)かしこき(畏れ多い)仰せ言を(帝の仰せを)光にてなむ(光明として、拝見いたします)」とて、見たまふ(北の方はそう云って帝の手紙を読みなされる)。

「ほど経ば(時が立てば)すこしうち紛るることもやと(少しは気が紛れるものかと)、待ち過ぐす月日に添へて(過ごせど日が立つほどに)、いと忍びがたきは(一層辛くなるのは)わりなきわざになむ(理屈では片付かない事だ、どうしたことだろう)。いはけなき(稚き)人をいかにと思ひやりつつ、両共に育まぬ(もろともにはぐくまぬ、母無く育つ)おぼつかなさ(頼りなさが気掛りだ)。今は(今となっては北の方に)、なほ昔のかたみになずらへて(帝自身を亡くした娘を偲ぶよすがと思つて貰つて)、ものしたまへ(御出で頂きたい)」など、こまやかに書かせたまへり(詳しくお書きに為っていた)。

「宮城野(みやぎの)の 露(つゆ)吹きむすぶ 風の音に
小萩(こはぎ)がもとを 思ひこそやれ」(和歌 1-2)

「宮も冷え込む秋の深まり、里の宮にはせめて陽だまり」(意訳 1-2)

*「宮城野」は宮城県仙台市東部の「萩の名所」で、其の地名から「宮の中」に通じる。「野」に「露」、「露」に「むすぶ」、「むすぶ」に「萩(の実一身)」を繋ぐ。「吹き結ぶ」は風で何かが吹き寄せられて、形作られること。また、「小萩」を「若宮」になぞらえる。歌面は「宮城野の草露を凍らせて一面霜で覆う野分の音に萩が枯れないかと案じられる晩秋の冷え込みだ」と荒涼感を歌い、意は「宮中で聞く晩秋の風の音に季節の冷え込みを感じて里住まいの若宮の暮らし振りが気に掛かります」と思い遣る。

とあれど、え見たまひ果てず(という帝の詠みなさった歌が手紙にあったが、北の方は胸が込み上げて来て最後まで読みきれなされなかった)。

「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに(生き延びる辛さを思い知らされて)、松の思はむことだに(長寿の誉れ高い高砂の松でさえ私を見たらどう思うことかと)、恥づかしう思ひたまへはべれば(心苦しいのですから)、百敷(ももしき、晴れの御所)に行きかひ(出入り)はべらむ(する)ことは、ましていと憚り多くなむ(とても恐れ多いことです)。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、みづからは(自分としては)えなむ(とてもそのようなことは)思ひたまへたつまじき(考えられません)。若宮は、いかに思ほし知るにか(若宮がどう思っているかといえ)、参りたまはむことを(参内することを)のみなむ思し急ぐめれば(ただそれだけを早くと思っているようなので)、ことわりに(父親に会いたいのは当然と)悲しう見たてまつりはべる(不憫に御見受け致しております)など、うちうちに(それとなく)思ひたまふるさまを(こうして考えている事を)奏したまへ(帝にお伝え下さい)。ゆゆしき身にはべれば(私が娘に先立たれた不吉な身ですので)、かくておはしますも(若宮が此処にいらっしゃるのが)、忌ま忌ましくかたじけなくなむ(忌まわしくも申し訳なくも存じます)」とのたまふ(と北の方は云った)。宮は大殿籠もりにけり(その若宮はといえば、寝てしまっていた)。

「見たてまつりて(若宮に御目に掛かって)、くはしう御ありさまも(その御様子を詳しく)奏しはべらまほしきを(帝に御伝えしたいのですが)、待ちおはしますらむに(帝が御待ちですし)、夜更けはべりぬべし(すでに、夜も更けておりますれば)」とて急ぐ(命婦はそういつて帰りを急いだ)。

「暮れまどふ(夕暮れに塞ぐ)心の闇も堪へがたき(暗い気持ちは辛すぎる)片端をだに(かたわをだに、ほんの少しでも)、はるくばかりに(晴れるように)聞こえまほしうはべるを(聞いて頂きたいので)、私にも(わたくしにも、こんどは個人的にでも)心のどかに(ゆっくりと)退出給へ(まかでたまえ、御休みの日にでも御立ち寄り下さい)。年ごろ(数年来)、嬉しく面だたしき(うれしくおもだたしき、晴れがましい御袴着などの)ついでにて(折に)立ち寄り給ひしものをお立ち寄り頂いておりましたものを、かかる御消息(おんしょうそこ、弔問)にて見たてまつる(お見えになるのは)、返す返すつれなき命(恨めしい回り合わせ)にもはべるかな(存じます)。

(亡くした娘は)生まれし時より、思ふ心ありし(希を託された)人にて、故大納言、いまは(今際)となるまで、『ただ、この人の宮仕への本意(ほい、本人の意思ではなく本懐宿命)、かならず遂げさせたてまつれ。我れ亡くなりぬとて、口惜しう思ひ くづほるな(挫けるな)』と、返す返す諫めおかれ はべりしかば、はかばかしう(有力な)後見思ふ人も(うしろみおもうひと、後見人も)なき(なしに)交じらひは(宮中に入れば)、なかなかなるべきことと(苦勞すること)思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじ(たがえじ、守る)とばかりに、出だし立てはべりしを(入内させましたが)、身に余るまでの御心ざし(御寵愛)の、よろづにかたじけなきに(何よりの有難さに)、人げなき恥を隠しつつ(他妃の心無い辱めを耐え忍んで)、交じらひたまふ(宮仕えされて)めりつるを(いたようですが)、人の嫉み深く積もり、安からぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様(よこさま、横死=志半ばでの死)なるやうにて、つひに かくなり はべりぬれば、かへりてはつらくなむ(反って辛くなってしまうと)、かしこき御心ざしを(帝の御厚情を)思ひたまへられはべる(思ってしまう)。これもわりなき(これは理屈ではない)心の闇になむ(心の嘆きで御座います)』

と(と北の方は)、言ひもやらず(云い終らずに)むせかへりたまふほどに(咽せ返っている内に)、夜も更けぬ。

「主上も(うえも、帝も)しかなむ(そう仰っておいでです)。『我が(帝ご自身の)御心(おんこころ、御気持ち)ながら、あながちに(強ち特別に)人目おどろくばかり(周りが驚くほど)思されしも(故御息所に思い入れなされたのも)、長かるまじきなりけりと(長く続かないものだったと)、今はつらかりける(今となつては辛いばかりの)人の契りになむ(出会いはった)。世にいささかも人の心を曲げたることはあらじと思ふを(人を傷付ける心算など毛頭無かったが)、ただこの人のゆゑにて(由縁にて、不幸を見ると)、あまた(多くの)さるまじき(謂われ無き)人の恨みを負ひし果て(買った儘で)果ては(死んでしまつては)、かううち捨てられて(今の自分がこうして先立たれて)、心をさめむ方なきに(心を鎮める事も出来ずに)、いとど人悪ろう(ひどく見つとも無く)かたくなに(頑なに、偏屈に)なり果つるも(成り果てていると言うのも)、前の世(さきのよ、前世の)ゆかしうなむ(因縁なのだろう)か』とうち返しつつ(と帝は何度も仰つては)、御しほたれ(枝折れ垂れ)がちにのみおはします」と語りて尽きせず(と命婦は全てを語り尽くせなかった)。(そして)泣く泣く、「夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず(今宵の内に)、御返り奏せむ(帰つて帝に御報告致します)」と急ぎ参る(と帰りを急いだ)。

月は入り方の(秋の夕月が山際に掛かる夜半近く)、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声ごゑもよほし顔(催し顔、物寂しい風情)なるも、いと立ち離れにくき草の(庭の)もと(足許)なり。

「鈴虫の 声の限りを 尽くしても 長き夜あかず ふる涙かな」(和歌 1-3)

「秋の夜長を鳴く鈴虫に、泣き負けしない情けなさ」(意識 1-3)

(命婦はそう云つて)えも(まだ)乗りやらず(車に乗りかねている)。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生(あさじゅう)に 露置き添ふる雲の上人」(和歌 1-4)

「草むらの虫と泣き暮らす荒れ屋に 涙を恵む天からの使者」(意識 1-4)

「かごとも聞こえつべくなむ(愚痴に聞こえてしまうでしょうか)」と言はせたまふ(と北の方は女中を遣って、庭の命婦に返歌した)。

(北の方は御所に)をかしき(気の利いた)御贈り物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと(何かの役に立つかと)残したまへりける御装束一領(ひとくんだり)、御髪(みぐし)上げの調度めく物(てうどめくもの、用具箱を)添へたまふ(命婦に持たせて帰らせた)。

(命婦を見送った)若き人びと(故御息所に仕えて、今は北の方邸に下がっている御女中)、悲しきことは(不幸の悲しさは)さらにも言はず(云うまでも無く)、内裏わたり(うちわたり、桐壺生前の華やかな宮中出入り)を朝夕にならひて(慣れていて)、いとさうざうしく(今の里住まいが大分物足りなく)、主上の御ありさまなど思ひ出で(思い出して)きこゆれば(いたようなので)、とく参りたまはむことを(早く参内なされるよう若宮に)そそのかし(すすめては)きこゆれど(いたようですが、北の方は)、「かく忌ま忌ましき身の(このように忌まわしい自分が)添ひたてまつらむも(若宮に付き添って参内しても)、いと人聞き憂かるべし(甚く人聞きが悪いだろう)、また、見たてまつらで(若宮に会えないままで)しばしもあらむは(暫らくすると)、いとうしろめたう(大変不安になる)」思ひ(北の方はそう思って)きこえたまひて(いらしたようなので)、すがすがとも(そのまますんなりと)え参らせたまつり(若宮を参内なされさせ)たまはぬなりけり(られることは御座いませんでした)。

[第三段 命婦帰参]

命婦は(御所に帰参して帝に御報告に上がったが)、「まだ大殿籠もらせたまはざりける(まだ帝は御休みになっておられなかった)」と、あはれに見たてまつる(その心中を御察し申し上げた)。御前(おまえ)の壺前栽(つぼせんざい、清涼殿と後涼殿との間の中庭の花々)のいとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに(慎ましく)心にくき(奥ゆかしい)限りの女房四五人(よたりいったり)さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり(話を語らせていらした)。このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌(ちょうごんか、玄宗皇帝と楊貴妃との愛をつづった中国古詩)の御絵(おんえ)、亭子院(ていじのあん、に住まわれた宇多天皇)の描かせたまひて(絵師を遣って描かれた御絵で)、伊勢(いせ、女流歌人)、貫之(つらゆき、歌人)に詠ませたまへる、大和言の葉(やまとことのは、和歌)をも、唐土(もろこし)の詩をも、ただその筋(悲恋話)をぞ、枕言(まくらごと、決まり言葉のように繰り返す)にせさせたまふ(女房たちに語らせていらした)。帰参した命婦に帝はいとこまやかにありさま問はせたまふ(北の方邸の詳しい様子を尋ねられた)。あはれなりつること(命婦は北の方邸の心痛な様子を)忍びやかに奏す(丁寧に御報告した)。御返り御覧ずれば(帝は北の方の御返書を御覧になったが)、

「いともかしこきは置き所もはべらず(勿体無い御手紙に身の置き所無く恐縮致します)。
かかる仰せ言につけても(その有り難い御言葉には)、かきくらす乱り心地になむ(心乱れる
ばかりで御座います)。

荒き風 ふせぎし蔭の 枯れしより 小萩がうへぞ 静(しず)心なき」(和歌 1-5)

枯れ野に一人残された 震える萩が可哀そう」(意識 1-5)

*この歌は帝からの手紙にあった「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(和歌 1-2)に
対する故大納言北の方の返歌。「吹きむすぶ風」を「荒き風」で受け、「小萩がもとを」を「小萩がうへぞ」と返して
いる。歌の面付きは「周りの草が枯れて吹き晒しの小萩が震える秋の寂しさです」だが、思いは「世間の風当た
りを防ぐ後ろ盾を失くした若宮の身の上が心配です、だから宜しく御守り下さい」となる。最大の後ろ盾であ
る帝に対して、いくら娘鬘貞でも「後ろ盾を失くした若宮」とは、帝を蔑ろにするにも程がある。更に言えば「宜
しく御守り下さい」も越権である。父帝が若宮を如何に遇するかは摂関家ならぬ余人が口を挟むなど恐れ多く、
同情を以ってしても庇えない。無論、これは暗意である。歌い上げているのは厭くまで秋の風情なのである。
しかし然うなると帝の歌意も解していない事に成ってしまう。何れにしても非礼この上ない。

などやうに(このように)乱りがはしきを(取り乱しがましい返歌を、まるで父帝が邪険で
でもあるかのような)、心をさめざりけるほどと(娘を亡くした悲しみの余りだろうと)御覽
じ許すべし(御読みになって敢えて許された)。(帝は)いと(甚く)かうしも(取り乱している
と)見えじと(見えないように)、思し静むれど(悲しみに耐えていたが)、さらに(もうこれ
以上は)え(とても)忍びあへさせたまはず(抑え切れず)、御覽じ初めし(故御息所を見初め
た時からの)年月のこことさへ(年月の事々を)かき集め(思い出せるだけ思い出して)、よろづ
に思し続けられて(一つ一つ懐かしんで)、「時の間も(以前は片時の間も桐壺と離れると)
おぼつかなかりしを(気が気でならなかったのに)、かくても月日は経にけり(今はこうして
先立たれてから既に何日も過ぎてしまった)」と、あさましう思し召さる(繰り返し虚しく
御思いになった)。

「故大納言の遺言あやまたず(夫の遺言通りに)、宮仕への(娘を入内させるという)本意
深くものしたりし(本懐を見事遂げられた)よろこびは(北の方の晴れがましきは)、かひあ
るさま(甲斐有る様、娘が生きて)にとこそ(いればこそ)思ひわたりつれ(と意思続けていた
だろうに)。言ふかひなしや(今となっては云う甲斐もない事だ)」とうちのたまはせて(と
帝はふと漏らされて)、いとあはれに思しやる(北の方に深く同情された)。「かくても(そ
れでも)、おのづから若宮など生ひ出で給はば(おいいでたまわば、成人した暁には)、さる
べきついで(然るべき序で、立太子の栄誉に与る折)もありなむ。命長くとこそ(命永らえて
の事とこそ)思ひ念ぜめ(思って吉報を待たれよ)」

などのたまはず(などとも仰った)。かの贈り物御覽ぜさす(そして命婦が持ち帰った北の
方からの贈り物を御覧になった)。「亡き人の住処(すみか)尋ね出でたり(捜し当てた)けむ
(という)しるしの(証拠の)*釵(かんざし)なら(だったら)ましかば(希ましいものを)」と思
はずも(と帝は桐壺の形見の品を見て思ったが)いとかひなし(全く頼りない、便り無い)。

*「証拠の髪差」とは、「長恨歌」の中で幻術士が楊貴妃の靈魂のありかを探し当てた証拠に持って帰ったという簪、との事。この故事から、幻術士と真希しを「幻」と云い置いて帝は次の歌を読んだ

「尋ねゆく 幻もがな つてにても 魂(たま)のありかを そこと知るべく」(和歌 1-6)

「喩え幻だとしても 噂話に縋っても 御霊の許を尋ねたい」(意識 1-6)

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき(優れた)絵師といへども、筆限りありければ いとにほひ(匂い、魅力の実感)少なし。大液芙蓉(たいえきのふよう、「長恨歌」で楊貴妃の美しさを例える池の蓮)未央柳(びおうのやなぎ、同じく宮中の柳)も、げに(それらしく)通ひたりし(似て見えた)容貌(かたち)を、唐(から)めいたる装ひはうるはしうこそ(麗しくは)ありけめ(あつたろうが)、なつかしう(故御息所を懐かしんで)らうたげ(労長け、気品ある)なりしを(その姿を)思し出づるに(思い出せば其の匂いは)、花鳥(はなとり)の色にも音にも(いろにもねにも、蓮や柳のように)よそふべき(寄添うべき、例えてしまえるような)方ぞなき(ものではなかった)。朝夕の言種(ことぐさ、口癖)に、「翼(はね)をならべ(雌雄同化した一羽の鳥となって)、枝を交はさむ(枝と枝が融合して一本の枝になる)」と契らせたまひしに(と二人で誓い合ったのに)、かなはざりける(叶わなかった)命のほどぞ(運命の何という過酷さかと)、尽きせず恨めしき(帝は恨めしく諦めきれなかった)。

風の音(おと)、虫の音(ね)につけて、もののみ悲しう思さるるに(帝は物悲しく御思いの御様子だったが)、弘徽殿(こきでん=後宮首座の部屋、その部屋に住む女御=右大臣の娘なる帝の第一夫人)には、久しく上の御局(うえのみつぼね、帝の昼御座近くの清涼殿内控え間)にも参う上り(もうのぼり、御挨拶に出向かれる)たまはず(こともなく)、月のおもしろきに(月夜に興じて)、夜更くるまで(夜遅くまで)遊びをぞ(音曲で騒ぎ立てたり)したまふなる(して御出ででした)。(帝にはそれが)いとすさまじう(酷く無神経な)、ものしと(ものに思つて)聞こし召す(いらしたようです)。このごろの(近頃の)御気色を(おんけしきを、帝の御様子)見たてまつる(伺った)上人(うえびと、殿上役人)、女房などは(女官たちは)、かたはらいたしと(弘徽殿の行状に辟易していると)聞きけり(いうことだった)。いとおし立ち(ひどく押しの強い、我が強い)かどかどしきところ(勘の鋭い角々しい所)ものしたまふ御方にて(ある性格の方なので)、ことにもあらず思し消ちて(桐壺の不幸など気にしないで)もてなし(そういう振る舞いを)たまふなるべし(なさっていたのでしょう)。月も入りぬ(いやはや、月も消え入りました)。

「雲の上も 涙にくるる 秋の月 いかですむらむ 浅茅生(あさじゅう)の宿」(和歌 1-7)

*「雲の上」は月の縁語で内裏を示す。「すむ」は「澄む」と「住む」。「浅茅生の宿」は草生す故大納言邸にいる若宮。ただ、この歌はダブル・ミーニングの他には、歌自体の趣は感じられない。

「宮中で泣き暮らす 秋の月夜に どう暮らすのか 里の若宮は」(意識 1-7-1)

「雲の上でさえ 涙で曇る秋の月は 里では到底 澄んでは見えまい」(意識 1-7-2)

思し召しやりつつ(帝はこのように若宮を案じながら)、灯火(ともしび)をかかげ尽くして(油が燃え尽きるまで)起きおはします(起きて御出ででした)。右近の司(うこんのつかさ、守衛)の宿直(とのい、夜警の交代)奏の声(ぞうしのこえ、報告の声)聞こゆるは(聞こえたということは)、丑に(うしに、左近から右近への交代時間なので、午前一時に)なりぬるなるべし(なってしまったようだ)。人目を思して(帝は人目を気にして)、夜の御殿(おとど)に入らせたまひても(寝床に就かれても)、まどろませ(うとうと)たまふこと(すること)もかたし(出来なかった)。朝(あした)に起きさせたまふとても(朝になって御起しに来た者にも)、「明くるも知らで」と(明けた事にも気付かなかったと云いながら、故御息所と寝過ごした日の事を)思し出づるにも(思い出してしまうので)、なほ(また)朝政は(あさまつりごとは、政務は)怠らせたまひぬ(休んでしまう事に)べかめり(なりそうだ)。

ものなども聞こし召さず(帝は口も利かれず)、朝餉(あさがれい、の間の朝食)のけしきばかり(形ばかりに)触れさせたまひて(箸を付けただけで)、大床子の御膳(だいしょうじのおもの、公式の間での昼食)などは、いと遙かに(ずっと遠退けて)思し召したれば(いらしたので)、陪膳に侍ふ(はいぜんにさぶらう、給仕を司る)限りは(者共にあっては)、心苦しき御気色を(御勞しい御様子を)見たてまつり嘆く(拝見し悲しんだ)。すべて、近うさぶらふ限りは(御側近く御仕えする者共は)、男女(おとこおんな)、「いと(全く)わりなきわざかな(困ったものよなあ)」と言ひ合はせつつ嘆く(と口々に愚痴った)。「さるべき契りこそは(帝と桐壺更衣には、きっと前世に余程の因縁が)おはしましけめ(あったに違いない)。そこらの人の(後宮中の)誹り(そしり、悪口)、恨み(うらみ、嫉妬)をも憚らせたまはず(省みることなく)、この御ことに触れたることをば(この桐壺の件に関しては)、道理をも失はせたまひ(理性を失って)、今はた(今また)、かく(このように)世の中のことも(政務までを)、思ほし捨てたるやうになりゆくは(放り出すようになってしまったのは)、いと(大いに)たいだいしき(怠怠しき、憂慮すべき)わざなり(事態だ)」と(こんなふうに御側用人たちは)、人の(ひとの、長恨歌にある人の)朝廷の例(おおやけのれい、玄宗皇帝が楊貴妃に溺れて政治を顧みなくなったこと)まで引き出で(引き合いに出して)、ささめき嘆きけり(ひそひそと憂れいた)。